

平成二十七年
度
清風中学校入学試験問題
前期試験

国語 (五〇分)

【一】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(ただし、設問の都合上、一부분本文を変えた所があります。)

中学一年生の陽平(僕)が受けた一学期の中間試験(学期ごとに二回あるテストのうちの一つの名前)の成績表が返ってきた翌日の場面である。

「おはよう……」

「陽平、なんだ、これは。最初からこれじゃあ、先が思いやられるな、まったく」

制服に着替えて朝食の席に着いた途端、お父さんは挨拶を返すこともなく、テーブルの成績表を指で突いた。

「お前、ちゃんと勉強してんのか」

僕は体育会系のノリがあるお父さんを苦手にしている。お父さんは小学生の頃から地域のクラブでラグビーを始め、高校生のときは名門校で全国大会へ行き、花園で活躍した。大学はラグビーの推薦枠で入学。昔、ボールを抱え、紫色のラグーシャツを着た写真を見せられたことがある。大学でも三年生まではそれなりの活躍をしたようだけど、腰を痛めて思うようなプレーができなくなったようだ。本当は、社会人になってもプレーを続けたかったのだけれど、怪我のこともあって、ラグビーを諦めて、精密機械メーカーに就職し、現在は営業部長をしている。

「朝っぱらから文句は言いたくないが……」

言いたくなければ言わなければいいのに……と言いつ返ししたいところだけど、それは無理。そんなことを言えば、きっと平手が飛んでくる。僕はお母さんに似たせいか、背が低く、おまけに細っこいから、仮に腕力で歯向かったとしてもお父さんには敵わない。

僕は黙ってトーストに手を伸ばして、イチゴジャムを塗ろうとした。

「おい、人の話を聞いているのか。お前、よく飯が食えるな」お父さんが声を荒らげた。

僕はびくんと背中を伸ばすと「う、うん、はい」と答え、慌ててトーストを皿に置いた。

「もう、朝から大声を出さなくても」

キッチンからハムエッグの載った皿を持ってきたお母さんが助け舟を出してくれた。

「顔を合わせたときに言っとかなきゃ、いつ言うんだ。大体、お前が中途半端に甘いから、こいつに気合いが入らないんだ」

「ええ、私のせい？」

「半分くらいは責任があるだろうって言ってるんだ」

矛先がこのままお母さんに向かってくれればいいけど……と期待したものの、お母さんは「はいはい、そうですか」と半ば捨て台詞を吐くようにキッチンに消えてしまった。

「なんだ、その言い草はっ」お母さんのその態度に、お父さんはムツとした様子だ。

これじゃあ、火に油を注いだようなものだ。完全に助けてくれないのなら、お母さんも余計な口出しをしなければいいのに。

案の定、お父さんの小言がエスカレートする。

「ラグビーとまでは言わないが、何か運動部に入ってたな、それで疲れてるっていうんなら情状酌量の余地もある」

お父さんは、本当は僕にラグビーをやらせたかったはずだ。でも、僕には適性がないと諦めたのだ。スポーツそのものが嫌いという訳じゃない。僕だって、その期待に応えられるものなら応えたかった。でも残念ながら、運動神経はそれほどある方じゃない。運動会の徒競走でも、三着や四着が定位置。

「なんで、オレに似なかったかなあ」お父さんが首を捻る。

部活は最初、卓球部にでも入ろうと思ったけど、結局、パソコンクラブに入った。

「大体、パソコンなんか、わざわざクラブに入ってることか。それとも、世間があつと驚くようなソフトでも作る自信があるのか」

「いや、その……」僕は首を振った。

親には話していないけど、僕の夢はゲームメーカーで働くことだ。僕なりに将来のことは考えている。

「何か人様より頭抜けた才能があればいいけどな。だけど、ないんじゃないだろう、上の学校へは勉強して行くしか。それには努力が足りないんじゃないか」

そう言われればそうかもしれない。普段はつい、休憩とか気分転換とか言いながらPSPを手にしてしまうから。それでも、テス

ト前はゲームを我慢して、深夜まで机に向かっていたのだ。

「今、世の中が大変な時期だってことくらい分かるだろう。お父さんもあれやこれやと大変だ。それでも頑張ってる。いいか、この状況は、そう簡単には上向かない。残念ながらお前が就職するような頃になっても良くならないだろう。つまり、就職できないかもしれないってことだ。そりゃあ、いい学校を出たからって必ずしも就職できるとは限らない。けどな、少しでもアドバンテージを持ってなきゃ、余計、不利だろ。そこんところが分かってるか。このままじゃ、大学どころか、満足な高校にだって入れやしないぞ」

②「はい……」僕は俯いたまま、消え入るような声で返事をした。

「だったら、少しはシャキッとしたらどうなんだ？」

と、そこへセーラー服姿のお姉ちゃんがダイニングに入ってきた。

「もう、お父さんたら、二階まで聞こえてるよ。陽平、あんたも、何、朝から叱られてんのよ」

僕は「うるせえ」と心の中で言い返した。

「中間の結果がな」

お父さんはお姉ちゃんに向かって首を振ってみせた。

「ああ、そういうこと」お姉ちゃんは意地悪そうな笑みを浮かべた。

僕は、頼むから余計なことを言うなよ、と念じた。しかし、そんな願いが通じる訳もなく……。

「だって、陽平、勉強してないもんねえ」

お姉ちゃんは椅子に座ると、トーストをかじりながらそう言った。お姉ちゃんは、今年の春、渋谷にある私立の女子高に合格したものだから、大きな顔ができる。

「そんなことねえし、ちゃんとやってるし」

ついムカついて、そう言い返した後、お父さんの顔を上目遣いに見た。お父さんが何か言いかけたとき、お姉ちゃんが言葉を続けた。

「部屋にこもって何やってんだか。お父さん、陽平に個室を与えたのは逆効果だったかもよ。大体、勉強ならダイニングでもやれるし」

おいおい、何言い出すんだよ。やめてくれよ。

「そうかもしれない。美鈴はそうしてるものな」

お姉ちゃんはダイニングテーブルの上に、これみよがしに参考書を広げたりして勉強をやっているの、両親の目に付きやすい。一方、僕といえば、口出しされるのが嫌で、もっぱら勉強は自室にこもることにしている。もっとも、勉強するときだけじゃないけど……。

「美鈴は偉いよなあ、それでちゃんと第一志望校に入ったんだから」

「で、しよう」

お父さんに褒めてもらって、お姉ちゃんが勝ち誇ったように僕を見た。

大体、お姉ちゃんは昔っから要領がいい。普段、お父さんがいないところでは、お父さんのことをボロカスに言っているくせに、点数の稼ぎ方を知っているのだ。

「ね、お父さん、私、頑張ったでしょう？ で、マルキューで欲しいものがあるんだけど」

お姉ちゃんが調子に乗って、ちゃっかり洋服をねだる。

「美鈴は交渉上手だな。ま、仕方ない、お母さんと話をしろ」

「やったあ」

お姉ちゃんが僕をダシに洋服を買ってもらえるのは悔しいけど、今日のところはそれで少しだけ予先がズレてくれて助かった。

「もう、あなたたち時間よ。あなたも会社遅れるわよ。ほら、美鈴も陽平も」

お母さんの追い立てる言葉に、みんなが席を立った。なんとか暴風雨になる前に、やり過ごしたような気分になる。

お父さんは紺色のスーツの上着をつかんで「とにかく、もう少し頑張れ」と、僕に念を押した。

「あ、はい……」

そう答えたものの、実は、頑張れって言われることがいちばん嫌いだ。僕なりにもう精一杯やってるつもりだ。ただ誰もそれを認めてくれない。僕だって勉強以外に色々と問題を抱えているっていうのに……。

お父さんとお姉ちゃんが玄関に向かうのを見届けてから「あ、忘れ物」と言うと、僕は一旦、自室に戻った。

⑥ 急ぎ、押し入れの襖を開けると、下段にある空間に入り込んで大きく息を吐いた。ほんの一、二分でいい。説教されて嫌な気分をリセットしたい。これは僕にとって、手軽な現実逃避なのだ。

理由は自分でも分からないけど、ここがいちばん落ち着く。特に嫌なことがあった日はかなり癒される。

この家はおじいちゃんが建てたもので、最近まで、おじいちゃん、おばあちゃんと同居していた。ところが去年の秋、ふたりは千葉の内房にある介護施設が併設されたマンションに引っ越した。でも、ふたりとも介護が必要な訳じゃない。

「動けるうちにあれこれ自由に楽しみたいんだよ」

釣りが趣味のおじいちゃんと、草花を育てるのが好きなおばあちゃんは、願いが叶って満足している様子だ。

そして、ふたりが使っていた一階の和室が僕のものになった。小さな庭に面した南向きの部屋だ。それまで僕は両親と一緒にの部屋で寝ていて、随分前から自分の部屋を与えられていたお姉ちゃんと差別されている気がしていたが、ようやく解消された。

おじいちゃんたちが居なくなってしまったのは淋しい気もしたが、自分の部屋が持てたことは嬉しかった。

六畳の畳の上に水色のカーペットを敷き、同系色のカーテンをつけてもらった。ベッドは新品を買ってもらったけど、机は従兄弟から譲ってもらった。机はお古でも充分。とにかく、やっと僕の城が持てた。しかも、押し入れという「基地」までも手に入れたのだ。

上段には、昔、遊んで捨てられず仕舞いのおもちゃが、透明な衣装ケースに入れられている。特に、プラレールシリーズの電車たちは、今でもときどき取り出して懐かしむことはある。その姿を見たお姉ちゃんは、僕のことを「オタク小僧」と呼ぶようになった。そもそも押し入れに入ったキッカケは、幼稚園の頃、おばあちゃんとかくれんぼをしたとき、この中に隠れたことだった。なぜか暗闇の中でワクワクしたのだ。

それからは、おじいちゃんたちが留守をしていると、こっそり部屋に忍び込んで押し入れの中に入るようになった。

自分の部屋になってからは、ゲーム機を持ち込んだり、懐中電灯で照らしながらコミックスを読んだりするのが楽しくて仕方なかった。

勿論、家族には内緒にしている。だから押し入れにいるとき、お姉ちゃんが僕のコミックスを目当てに、ノックもしないで勝手に入ってくると焦る。バレないように、足音が廊下に出るまで、じっとしたまま息を潜めなければならぬ。

「勝手に入るなよ」

後で文句を言っても、お姉ちゃんは一向に改める気配がないので頭にくる。

最初の頃、押し入れの中はカビ臭くほこりが舞っていたので、喉が痛くなった。春先、くしゃみと鼻水を出していたら、お母さんが「あら、嫌だ、陽ちゃん、花粉症になったの」と勘違いをして、小型の空気清浄機を買ってくれた。以後、僕は、それを持ち込んで快適な空間に変えた。

だけど、これからの暑い季節、襖を閉め切ってしまうとエアコンの冷気が届かなくなって少し大変かもしれない。

僕は目を凝らしながら、狭く薄暗い押し入れの中を見渡した。楽しいはずの基地が、最近は避難場所になることが多くなってしまったな。思わず大きな溜息が漏れた。

「陽平、何やってんの、遅刻するわよ」

廊下からお母さんの声が聞こえた。

僕は急ぎ這い出して、鞆を肩に引っ掛けると、部屋を飛び出した。

(森浩美『押し入れ少年』)

⑦ 花園 —— 高校ラグビーの全国大会が行われるラグビー場の名前。

情状酌量 —— 悪いことをした者の事情を聞いて同情し、その罰を軽くしてやること。

アドバンテージ —— 有利な点。

マルキュー —— 渋谷にあるショッピングビル「109」のこと。

問一 ― 線部 a、c の語句の本文中の意味として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

a 「歯向かった」

ア 偶然に勝てた
イ 反抗はんこうしてみた
ウ 目先を変えた
エ 自信があつた

b 「頭抜けた」

ア 特に目立って際立った
イ 社会の役に立つような
ウ 努力の末に勝ち取った
エ 注目の的になるような

c 「これみよがしに」

ア 遠慮えんりょがちに
イ 整理せずに
ウ 得意そうに
エ 弟と一緒に

問二 ― 線部①「お父さんの小言がエスカレートする」とありますが、本文では、小言がエスカレートして厳しく怒られるような状況を比喻ひゆ（たとえを用いた）表現を使ってどのように述べていますか。本文中から六字でぬき出して答えなさい。

問三 ― 線部②「『はい……』僕は俯いたまま、消え入るような声で返事をした」とありますが、この時の僕の心情の説明として適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 体育会系のノリがある父に僕の思いを理解させることなど、あきらめるしかない。
イ 進学や就職のことを語る父の話は正論で説得力があり、僕も父のようになりたい。
ウ ゲームメーカーで働きたいという僕なりの将来の夢を、絶対に父に認めさせたい。
エ 普段ゲームに流れてしまう僕の様子を思うと、父に対して強気な態度にならない。

問四 ― 線部③「意地悪そうな笑みを浮かべた」とありますが、このときの姉の様子と最も関係の深いものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア とまどい イ かんぐり ウ あざけり エ はげまし

問五 ― 線部④「逆効果」とありますが、ここでは陽平のどのような状況を言っているのですか、三十字以内で答えなさい。

問六 ― 線部⑤「少しだけ矛先がズレてくれて助かった」とありますが、どのようなことを言っているのですか。次の文章の空欄に、本文中の父の発言からそれぞれ適切な語句を五字でぬき出して答えなさい。

朝食の場での父の関心が、僕の（ i ） に対する不満から（ ii ） に入つたお姉ちゃんへの評価に移ったので、より厳しく怒られずに済んでよかった、ということ。

問七 ― 線部⑥「押し入れの襖を開けると、下段にある空間に入り込んで大きく息を吐いた」とありますが、「押し入れ」は現在の僕にとってどういう存在になっていますか。本文中から四字でぬき出して答えなさい。

問八 「僕の部屋」について、

I 僕の部屋から見て外にある庭は、東西南北どの方角にあるか答えなさい。

II 次に挙げるものの中で、

A 僕の部屋に無いもの

B 押し入れの中にあるもの

をそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 机

カ カーテン

イ ベッド

キ 畳

ウ 空気清浄機

ク プラレール

エ エアコン

ケ サッカーボール

オ カーペット

コ 襖

【二】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(ただし、設問の都合上、一部本文を変えた所があります。)

初め、漢字はおおむね亀のお腹の甲らや、牛や羊や鹿の肩胛骨に刻されました。なんと人の頭骨にも刻されました。それらの文字を「甲骨文字」と呼び、その文章化されたものを「甲骨文」と呼ぶ習わしです。しかし、大半は、亀の甲らに記されたものであり、しかも、それらはみな鋭い刃先のナイフのようなもので、きりりと刻まれています。なかには、その上に朱色を塗りかさねた形跡をもつものも見えます。日本の神社の門や鳥居が多く朱色に塗られているのは、きっと、邪霊や汚れをはばむ方法の一つであり、そうすることで神聖な場所であることを示したのでしょう。文字もまた、汚れを去って、永久に清浄なものとしてホゾンされるのです。^⑤殷の国がいくどか都を遷したのち、ついに安陽に定着した、武丁という王の時期に及んで、漢字の世界は成立したものと考えられます。

その安陽から出土した亀の甲らや、動物の骨には、たとえば、雨が降るか降らぬか、風が吹くか吹かぬか、穀物はみのるか、出産にキケンはないか、異族を征伐することができるか、祭りを行ってよいかなど、数えきれないほど多様な占いの記事がその漢字で刻まれています。それらのほとんどは、王が神に告げ、神に尋ね、神に訴えるという形式をとるのですが、なお加えて、神よりの応答を記すものも多く見えます。ちなみに神の応答は、その甲らを灼いたときの裂け目におのずと現れるものと信ぜられました。その裂け目を兆候といい、それを手がかりに、王は判断を下します。その判断のことばとともに、じつは、それが正しかったことを示す結果が、^①つぶさに記されるのです。

じつは、このことがとても重要な問題だと思われるのです。

王はきっとこの漢字を用いることによって、神に呼びかけ、そうしてはじめて神の反応が与えられるはずであると信じたのです。神とてもその期待によく応えたものと思われれます。神と王との通路はここにひらかれました。

王はその漢字をたよりに、神の許しや助けをしきりに求めます。もし、それらの要求が実現したとするなら、それは神の認めによるものであると確信するのです。そのことは、そのまま神の意志と王の意志とが一致したことにほかなりません。このとき、神と王とはさながら溶けあい、一体化したのだともいえましよう。そしてこの融合によって、王自身はもう神とひとしく神聖な存在となりうるのです。少なくともその保証を得るのです。

いまや王は唯一、神と交わり、神と通ずる資格をもつものとなります。そしてその資格をもつもののみが、民衆からのゼツダイな信頼と尊敬とを一身に集めることが可能となるのです。漢字は、^②どうやら、その王の特権を保証するために創造されたものではないかとも推量せざるをえないのです。

古代の支配のしくみは、基本的には、王自身が、神と人々との媒介者としての立場に身を置き、その重い使命を一人になうことを前提とします。『太平御覧』は、それまでにちりぢりになっていた文章をほぼことごとく収集した膨大な書ですが、そのうちに『帝王世記』の記述を引用した一節が見えます。

一方、フレーザーの『金枝編』は、王自らが犠牲となり、民衆の危機を救ったという説話を、東南アジアの各地域に広く捜し求めています。いわゆる「殺される王」の伝承です。中国もその例外でなかったことが知られます。このとき、王の生死のことは格別に深刻な問題とはされません。神との交渉、そしてその交渉の成果いかにによって、王の王たるゆえんが判定される、そのことこそが、それらの伝承のテーマである、^③といってよいでしょう。古代の王は、その宿命的な重責を果たす限りにおいて、はじめて王であることの証を立てることができたのです。

漢字は、王と神とをつなぐ、欠くことのできない方法の一つとして生まれました。その方法を用いて、王は、神に祈り、神を讃え、神と契約を結びます。もっとも漢字だけが、そのような役割を負うものとして生まれたわけではありません。漢字のみならず、それが古代文字に求められた使命であったものと思われれます。その中国での表れが、まさに漢字であったというべきでしょう。エジプトの王朝にも文字は生まれました。それは「神聖なる文字」という意味で、「ヒエログリフ」と呼ばれます。古代の文字は、神々との行き来をうながす方法として生まれたのにちがいありません。ただ、その「ヒエログリフ」は、いまは滅びてしまいました。「シュメール文字」も「線刻文字」もまた特定の言語学者や歴史学者の研究対象として重んぜられるよりほか、もはや世界の誰一人にも用いられることのない文字です。それを用いて話されることも書かれることもなくなってしまった、それらの文字は、^④すでに屍の文字というべきです。

漢字はといえば、^④ほぼ三三〇〇年にもわたって生きつづけてきました。しかも、それを生んだ中国だけのことに限らず、この日本の私たちの生活のうちになお漢字は息づいています。漢字ほど時間を超えて生命力をもちつづけた文字はどこにもありません。

漢字の世界は、おのずから秩序をもつ世界として、私たちの「物語」のうちに紡がれ、語られてゆかねばなりません。漢字をそれぞれ切り離して、その一字一字を孤立したものとしてあつかうのなら、その漢字は、あたかも星座の「物語」から追放された、さびしい星屑の一塊にとどまってしまいます。そのことはまた、漢字がその初めから形成していた、規律あるつながりと、まとまりをもつ世界をずたずたに切り裂いてしまう結果につながりかねません。

漢字の初めの世界に貫かれていた規律や秩序について、当時の人々は、それを分かったこととして、ごく自然のうちに受け入れていたことでしょう。⑤そのような感じ方や考え方をすっかり失ってしまった私たちは、その一字一字をもっぱら単独の記号として、慌ただしく記憶することのみを、いま強いられているかのように思われます。もう三三〇〇年もはるかに隔たった中国の人々の、その感じ方や考え方をそのままにとりもどすことは、もちろん困難をきわめることです。しかしとりもどすことはかなわぬまでも、その古代の人々の漢字に寄せた思いの深さを丹念に手探りしてゆくことのない限り、漢字の世界はもう二どと私たちの眼前に、その初めの姿を開示することなどないのではないかと、おそれるのです。

私たちは、古代の中国の社会や生活のほんとうのありさまを追求してゆくとともに、漢字の世界に展開した、その初めの「物語」を再び、私たち自身の「物語」として語ってゆく課題を背負っているように思われます。

(山本史也『神さまがくれた漢字たち』)

③ 殷——中国の古代王朝。

安陽——中国の都市。

媒介——両方の間に立って橋渡しをすること。

『帝王世記』の記述を引用した一節——ひどい干ばつに悩んだ殷の湯王が、神に雨乞いをする場面が描かれている。

問一——線部 a c のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 漢字はその成り立ちによっていくつかに分類されます。A・Bのような漢字を何というか。それぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

A 「日」「月」など、ものやことの形を絵に描いていたものを簡単にしてできたもの。

B 「上」「下」など、絵に表しにくいことがらを抽象的に点や線など記号で表したもの。

ア 指事文字 イ 会意文字 ウ 形声文字 エ 象形文字

問三——線部①「このこと」の具体的な内容として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 武丁の時期に漢字の世界が成立していたこと。

イ 雨が降るかどうかを占いで判断していたこと。

ウ 王と神とのやりとりが漢字で記録されたこと。

エ 神の応答が甲らを灼いた裂け目に現れたこと。

問四——線部②「王の特権」とは、何ですか。本文中から十三字でぬき出して答えなさい。

問五——線部③「屍の文字」とはどういうもののことですか。本文中から二十二字でぬき出し、最初と最後の五字で答えなさい。

問六——線部④「それを生んだ中国だけのことに限らず、この日本の私たちの生活のうちになお漢字は息づいています」とありますが、私たちの生活に息づく漢字として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 漢字をたくさん使った文章を書く人はとても賢い人だ、と世間一般では思われている。

イ 中国で書かれた漢文を日本語で読めるように記号を打って読みやすくする工夫をしている。

ウ 漢字から日本語にあうように仮名や外来語を生み出し今でもなお使っている。

エ 人と会話するとき、同音異義語の中でも意味のあう漢字を自然と頭のなかで探している。

問七 — 線部⑤ 「そのような感じ方や考え方をすっかり失ってしまった私たち」とありますが、私たちは何を失ったというのですか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 文字 イ 神 ウ 生活 エ 物語

問八 — 線部⑥ 「漢字の世界に展開した、その初めの『物語』を再び、私たち自身の『物語』として語ってゆく課題を背負っている」とありますが、その「課題」を解決するにはどうすることが必要ですか。本文中の言葉を使って五十字以内で答えなさい。

【三】の問題は、次のページにあります。

【二】 次の文章を読んで、下の①～⑩の意味にあてはまる語句を指定した字数にしたがって本文中からぬき出して答えなさい。
(意味は、『広辞苑』あるいは『明鏡』に記されているものです。)

実りの秋。この季節になると包丁の売れ行きが急に良くなるという。豊かな食材が市場を彩り、食欲が増すとともに、料理の腕をふるう意欲も高まるのだろう▲包丁といえは堺市が有名だ。職人用の和包丁では全国の9割以上のシェアを占める。古墳を築くための道具を作る鍛冶技術を土台に、平安末期からは刀の製造が盛んになった。16世紀にはポルトガルからタバコが伝わり、葉を刻む包丁作りで名声を高めた▲日本の食材の豊かさは包丁作りの発展を後押しした。3年前にオープンした堺刃物ミュージアムには137種類が展示されている。定番の出刃、刺身、菜切りをはじめ、餅や和菓子、巻きずし、スイカを切る専用のもの。アジさきやドジョウさき、クリ包丁、氷カンナなど用途に応じて細やかな工夫が凝らされている▲両刃の洋包丁とは異なり和包丁は片刃が基本だ。食材に当ててゆっくりと手前に引き、滑らせるよう

① (二字)	熟練した技術によって物を作ることを職業とする人。
② (三字)	ある企業の製品の売上高が市場全体の売上高に占める割合。
③ (二字)	物事の基礎。もとい。
④ (二字)	よい評判。ほまれ。
⑤ (二字)	流行にかかわりなく常に一定の売上げが期待できる基本的な商品。
⑥ (二字)	式典・催し物などの内容に工夫を加え、全体をうまく進行させること。
⑦ (三字)	急に人気が上昇してはやりだすこと。急激に盛んになること。

な感じで切り込んでいく。細胞を押しつぶさないので味と食感を損なわず、切り口も鮮やかだ。見た目の美しさも大切にすると和食文化を演出する道具である▲和食ブームの広がりでも堺の包丁は世界で引っ張りだこだ。最近の10年で輸出額は2倍近くに伸びた。ミュージアムにも週末、自分の目で品定めして包丁を買い求めようという外国人がひっきりなしに訪れる▲手作りの包丁の世界に魅せられ、鍛冶や研ぎの職人を希望する若者も増えている。だが、個人経営が多いので若者を雇って育てる余裕があまりなく、後継者の育成が課題だという。世界に誇る技術を伝えていくため、切れ味鋭いアイデアが求められるところだ。

⑧ (六字)	人気があって、多くの人が争って求めること。
⑨ (六字)	絶え間なく続くさま。
⑩ (二字)	利益があがるように、会社・商店などを運営すること。

(毎日新聞「余録」二〇一四年九月二一日)

⑩ 鍛冶 ―― 熱した金属を打ち鍛え、さまざまな器具を作ること、また、それを職業とする人。